

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：34305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02632

研究課題名(和文) 集団場面で気づかれにくい知的な遅れのない発達障害児の行動および人物画課題の特徴

研究課題名(英文) Characteristics of Behavioral and Figure Drawing Tasks in Developmentally Disabled Children Without Intellectual Delay Who Are Less Likely to Be Noticed in Group

研究代表者

落合 利佳 (RIKA, OCHIAI)

京都女子大学・発達教育学部・教授

研究者番号：80435304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：集団場面で気づかれにくい知的な遅れのない発達障害児の実態を把握し、その特徴を明らかにすることを目的に以下の内容を行った。公立保育所での「気になる子」の実態調査を行い、保育者の児童自身の困り感と、支援の必要性、および支援の難しさの現状と課題について明らかにした。また、就学前の高機能自閉スペクトラム症児を3つのタイプに分け、保育者及び保護者の意識および子どもの実態について、「幼児版自己抑制・自己主張尺度」、チェックリスト、人物画検査から特徴について明らかにした。さらに開発中の「幼児版社会性・行動発達評価尺度」の臨床応用の可能性について検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

知的に遅れのない学習面や行動面で困難があると推定された小学生(8.8%)に対し、約7割は支援の必要がないと判断され、通級での支援は約1割であるという教育現場の現状がある(平成24年、文部科学省)。本研究は増加傾向にあるこれらの児童のうち、特に集団場面で気づかれにくく支援が受けにくい発達障害児に対し、就学前の集団場面での特徴、支援の現状と課題を明らかにし、また、既存および開発中の社会性尺度等が、就学前及び小学校教育現場で活用されることで、目立ちにくいタイプの発達障害児の困り感への理解および、支援の必要性への認識が深まり、早期発見、早期支援へとつながることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to understand the actual situation of children with developmental disabilities without intellectual delays who are not easily noticed in group situations and to clarify their characteristics. We conducted a survey of "children of concern" among childcare workers to understand the current situation and issues in childcare with regard to the children's sense of distress, the need for support for the children, and the difficulties in supporting the children. In addition, preschool children with high-functioning autism spectrum disorder were divided into three types, and their characteristics were examined based on the "Early Childhood Version Self-Restraint and Self-Assertion Scale" and a Figure Drawing Test. In addition, we examined the possibility of clinical application of the "Early Childhood Social and Behavioral Development Scale," which is currently under development.

研究分野：発達障害

キーワード：高機能自閉スペクトラム症 受動型 幼児 社会性・行動発達評価尺度

1. 研究開始当初の背景

[教育現場において支援が必要な児童の現状と疑問]

「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(文科省、2012)によると知的に遅れのない学習面や行動面で困難があると推定された小学生は 7.7%であり、また、何らかの困難を示していると教員が捉えている児童生徒がそれ以外に存在することも示唆されていた。

[教育現場における教員による「気になる子」への気づきの問題点]

これまでの我々の研究においても、初等教育現場の教員から見た「気になる子」と「その内容」に関する追跡調査においても、「気になる子」として挙がってくる児童とその「気になる内容」は一貫しておらず、教員の注意・興味・関心に寄与するため、個々の教員により「気になる子」に偏りがあるといった問題点があり、その内容も学習面、多動、衝動、こだわりなど集団場面で目立つ内容であった。このことは、授業に集中していないが騒がず離席が見られない不注意優勢型の注意欠如多動症(以下 ADHD)や、表出が控えめで受動型の自閉スペクトラム症(以下 ASD)の特性を持つ児童は教員に気づかれにくいことを示唆している。就学前児童に関しては、「気になる子」の多くが、知的な遅れがない発達障害の特徴を持っており(池田、2007)、このような子どもが抱える問題は発見されにくい、認められにくい、理解されにくい(下野、2007)とされているが現状は把握されていなかった。

[教育現場における支援の現状・意識・意義]

他害などの問題行動が見られる通常級在籍児童への支援・指導に関して多数の実践研究報告がある一方で、集団内で問題を起こさない発達障害児への支援に関する同様の報告は見受けられなかった。また、保育現場でも、多動、衝動性、他害や自傷が認められる児童と比較して、援助要求や拒否の表出が弱く受け身な姿勢や不注意といった特性のある児童への支援の必要性や本人の困り感への認識は高くなかった(落合、2014)。しかし、上述の障害特性は、就労に関するスキルである「わからない仕事を提示されたとき質問する」「できないことを言われたとき断る」(山本、2013)、すなわち、社会人になったときに重要な意味を持つてくる内容であり、将来、学業、就労、精神状態に大きな影響を与えることが示唆されていた。教員が要支援児童と認識している場合でも 4 割近くが支援を受けていないという先述の文科省の調査結果とも合わせると、より目立たない児童が実際に教育現場で支援を受けているかには明らかでなかった。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、困り感や援助表出が苦手であるなど受動型の ASD の特性を有する、集団場面で気づかれにくい知的な遅れのない発達障害児に特化した 集団での児童の実態および支援の現状把握、「幼児版社会性・行動発達評価尺度」の臨床応用の可能性の検証、チェックリスト作成、人物画描画課題の特徴を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

(1)保育所での「気になる子」実態調査

公立保育所(14施設)の異年齢児クラスを含む 3・4・5 歳児の担当をしている保育士 58 名を対象に「気になる子」の実態調査を行った。(有効回答率 79.8%)

調査期間:2019 年 8 月~2020 年 2 月

調査内容:担当クラスの「気になる子」の有無、内容、支援状況および、気になる項目(粗大運動、微細運動、不注意、多動、衝動性、社会性などを含む 21 項目)について、子どもの困り感、支援の必要性、難しさに関する意識。

(2)就学前の高機能自閉スペクトラム症児の型別の特徴

就学前の高機能 ASD 児(年中・年長児)を 3 つの型(孤立型・積極奇異型・受動型)に分け、それぞれの集団・家庭での実態と社会性尺度等の諸項目との関連について検討を行った。分析は集団での様子を中心に行った。

対象:専門機関に通院している高機能 ASD 児(年中・年長)38 名とその保護者、保育所・幼稚園の担任。

調査期間:2020 年 1 月~2022 年 9 月

内容:発達又は知能検査、人物画検査、幼児版社会性行動尺度(開発中)(対象児)

幼児の自己主張-自己抑制に関する質問紙(首藤 1995)、子どもの困り感に関する意識調査、TASP(保護者・担任)

当初、データ数は、各型 30 名(男女 15 名)の計 90 名を予定していたが、コロナ感染症の蔓延の影響により最終的に 38 名となった。

4. 研究成果

(1) 保育所の「気になる子」の実態調査

公立保育所 14 施設に勤務している 3・4・5 歳児および異年齢クラスを担当している保育士を対象に「気になる子」への意識と支援に関する実態調査の有効回答率は 79.8% (46/56 人)。各クラスに占める「気になる子」の割合は 36.5~42.8%であった(表 3)。

年長クラスの特徴: 保育士が「気になる子」は、多動や不注意といった ADHD 特性に関連する項目で高く、集団での一斉行動を行う際に、逸脱行動を伴いがちで、特に個別の声掛けや支援を必要とする内容で気になりやすいことが明らかになった。また、手指の巧緻性に関連した項目で高い割合を示し、就学後の学習に關与する内容が気になりやすい傾向にあった (data not shown)。

すべての「気になる子」に支援が行き届いていない現状約 2/3 の「気になる子」は支援が十分にされていなかった(図 1)。その理由として、人的資源不足、時間的余裕の他、他に支援が必要な子どもがいるため(優先度の低さ)、支援方法がわからないことが挙げられた(図 2)。また、「マイペースさ」や「困っているときになかなか言葉で援助を求めない」といった子どもからの働きかけが少なく保育者が意識して積極的に働きかける必要のある項目や、「発音」、「体の使い方」や「手先の不器用さ」といった、言語療法、作業療法の専門的な知識やスキルを要する内容に関して、支援の仕方がわからない保育士がいることが明らかになった。

ASD 特性に関連した気になる子への意識と支援の実態

ASD 特性に関連して、要求・拒否・援助要請といったコミュニケーションに課題のある子どもの困り感、ADHD 特性からくる多動よりも高いと意識していたが、支援の必要性については、ADHD 特性からくる行動(我慢できない、他害)の方が高く、集団場面での目立つ行動、集団の場を乱す行動のほうに意識が向きやすく支援を行う傾向にあった。また、同様に、友達関係についても、人の関わりに課題があっても集団内でトラブルがなければ、本人の困り感や支援の必要の認識が他の項目より低く、集団での意思表示の弱いもしくはされない受動型、孤立型 ASD 児に対するコミュニケーション支援などが後回しになる実態が明らかになった。

(2) 就学前の高機能自閉スペクトラム症児の特徴

集団と家庭で違う 3 つの型と他の発達障害との併存(図 4・5)

図 4 に示す通り、家庭と集団で型が異なる児童の存在が明らかになった。積極奇異型は家庭も集団も積極奇異型である場合がほとんどであったが、集団での孤立型と受動型については、家庭では一定の割合で積極奇異型を呈していた。また、ほとんどが他の発達障害(ASD、DCD)の併存が見られた。

自己主張・自己抑制尺度による分析(図 6・7)

4・5 歳児の平均値(首藤 1995)と比較した場合、自己主張尺度の平均値は、ほぼ全ての型の家庭と集団で下回った。自己抑制尺度の平均値は受動型(集団)の方が高く、積極奇異型(家庭・集団)、孤立型(家庭)で低い結果となった。

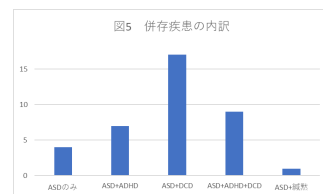
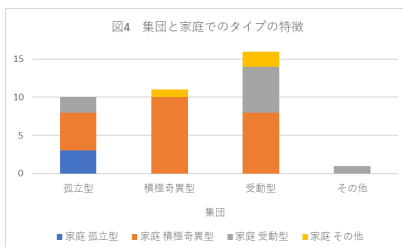
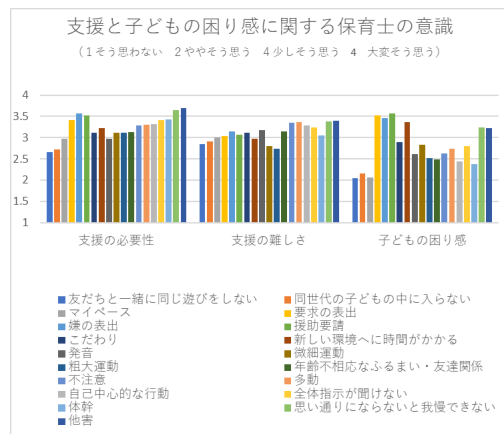
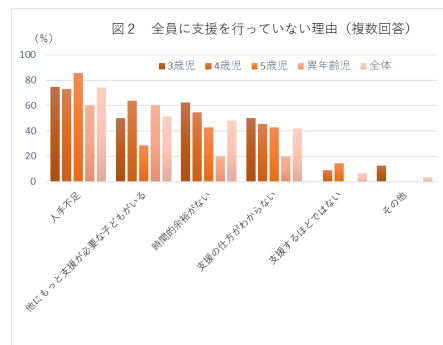
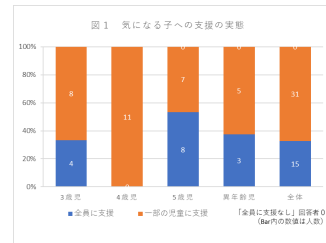
型による特徴として、受動型 >> 孤立型 > 積極奇異型の順で自己抑制尺度スコアは家庭も集団でも高い傾向にあった。また、家庭と集団でのスコア差は、孤立型・受動型 > 積極奇異型で大きく、孤立型と受動型では集団でより抑制的に行動(我慢している)傾向が明らかになった。

一方で、自己主張尺度については、集団も家庭でも、積極奇異型 > 受動型 >> 孤立型の順で高かった。家庭とのスコア差は孤立型 > 受動型 > 積極奇異型で大きかったことから、孤立型の自己主張の弱さは、集団場面でもより顕著であり、集団では家庭と比べて自己抑制的に行動して

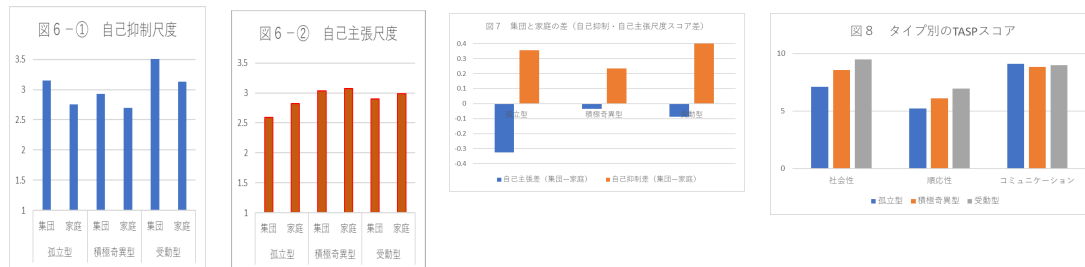
表 3 担当クラスでの「気になる子」の割合

クラス	「気になる子」の割合
3歳児	36.5 (13.0-82.4)
4歳児	38.1 (10.3-63.6)
5歳児	42.8 (24.0-76.9)
異年齢	37.3 (17.4-75.0)
全体	39.1 (10.3-82.4)

(数値は%)



いることが分かった。また、受動型は、自己抑制傾向（我慢する）が強く、それは集団ではより顕著であった。積極奇異型は、集団では家庭と変わらず自己主張しており、さらに家庭ではより自己抑制が難しいことが伺えた。



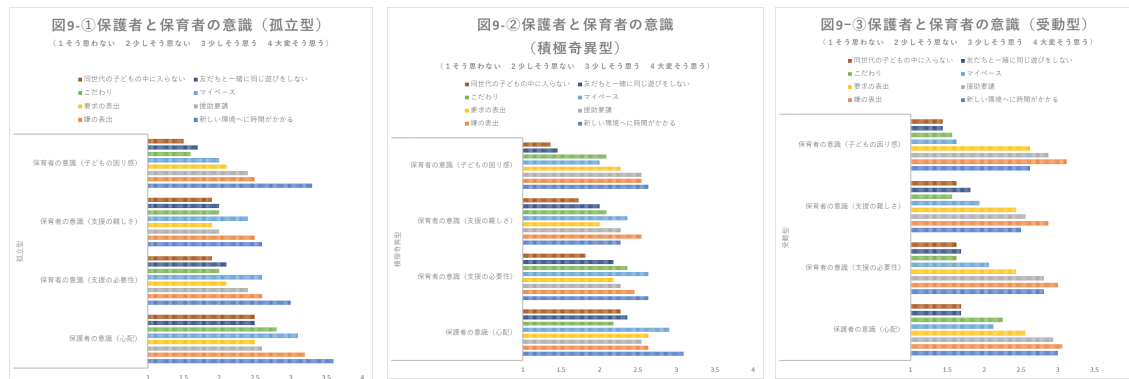
TASP との関連（図 8）

幼稚園・保育所の担任による TASP を用いた評価では、コミュニケーションのスコアは 3 群間で差はなかったものの、社会性・順応性では、受動型で他の 2 群より高い傾向にあり、TASP では社会性・順応性についてのチェックだけでは、受動型の高機能 ASD 児が見逃される可能性が示唆された。

保護者と保育者の意識差（図 9）

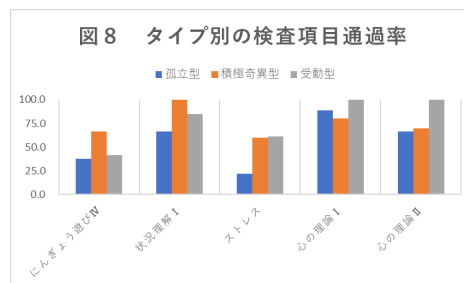
保護者の意識として、新規場面での適応に関して特に孤立型で、積極奇異型ではこだわり、受動型では拒否の表出や援助要請に関して心配が高かった。

保育者の意識として、これらの項目に関しては保護者の心配と同様に、子どもが困っていると感じており、支援の必要性も感じていることが明らかになった。一方で、実際支援を行うとなる場合、特に受動型の児へのコミュニケーション支援に難しさを感じていた。



幼児版社会性行動尺度（開発中）の項目毎の通過率の特徴（図 10）

検査項目において主に図 10 に示すように型毎の特徴がみられた。比較的自由度の高い検査者と関わる検査項目（「人形遊び」：検査者と人形を使って遊ぶ）では、積極奇異型が他の 2 つの型と比較して高い通過率を認めた。また、集団場面での対人トラブルに関する内容（「状況理解」：集団場面のイラストを見て状況や気持ちを説明する）では積極奇異型 > 受動型 > 孤立型の順で通過率が高く、集団での子ども同士のかかわりやそこでのトラブルといった経験との関連が示唆された。また、困った状況での対処法についての問い（「ストレス場面」：腹痛時の対処法などストレス場面への対応についてイラストを見て答える）では、孤立型で通過率が他の 2 型と比較して極端に低かった。また、ストレスの原因が自分自身にある場合と比較して、自分でも人でもない場合、他人にある場合の正答率はどの型においても正答率が低い傾向にあった。心の理論に関連した検査項目では、受動型の通過率は 100%であったのに対し、他の 2 つの型では 6~8 割台であった。これらの結果を基に、今後、高機能 ASD 児の就学前のスクリーニングとしての活用方法について検討を行っていく予定である。



<引用文献>

「気になる子」に関する保育者の意識と支援の実態 保育所アンケートからクラス構成に着目して 京都女子大学 発達教育学部紀要 17,1-11 2021/03 (表 3, 図 1, 図 2)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中 駿、郷間安美子、井上和久、牛山道雄、清水里美、落合利佳、池田友美、加藤寿宏、郷間英世	4. 巻 1
2. 論文標題 幼児の初期の概念形成：なぜなぜ課題の作成から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川村菜月、落合利佳	4. 巻 19
2. 論文標題 言語障害を伴うダウン症者へのPECSを用いたコミュニケーション指導に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 155-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 郷間 英世、田中 駿、清水 里美、足立 絵美	4. 巻 2
2. 論文標題 現代の子どもの発達の様相と変化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達支援学研究	6. 最初と最後の頁 99-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51013/jadsjournal.2.2_99	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 郷間英世	4. 巻 43
2. 論文標題 医療機関の発達外来における新版K式発達検査の利用を中心に、診断域下にある幼児・児童・生徒への教育支援に向けたアセスメントとその活用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 352-364
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 利佳	4. 巻 16
2. 論文標題 広さを考慮した保育環境の構造化と個別配慮の実際ー京都市営保育所での取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学 発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郷間 英世、牛山 道雄	4. 巻 81
2. 論文標題 身体模倣の正中線交差と社会的スキルの関係性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 駿、中市 悠、家森 百合子、岩見 美香、清水 里美、郷間 英世	4. 巻 37
2. 論文標題 自閉症スペクトラム幼児の新版K式発達検査2001と新版K式発達検査2020のDQの比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達・療育研究：京都国際社会福祉センター紀要	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合利佳	4. 巻 17
2. 論文標題 「気になる子」に関する保育者の意識と支援の実態 保育所アンケートからクラス構成に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中駿, 加藤寿宏, 落合利佳, 井上和久, 清水里美, 池田友美, 牛山道雄, 大谷多加志, 大久保圭子, 郷間英世	4. 巻 79(6)
2. 論文標題 幼児期から児童期初期の身体模倣の発達と男女差	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 607-616
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 五位塚和也
2. 発表標題 福祉型障害児入所施設に入所する特別支援学校児童生徒への指導上のニーズと有効な支援に関する検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 落合利佳
2. 発表標題 広さを考慮した保育環境の構造化と個別配慮の実際 京都市営保育所での取り組み
3. 学会等名 第67回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中駿, 牛山道雄, 加藤寿宏, 落合利佳, 池田友美, 清水里美, 井上和久, 大谷 多加志, 郷間英世
2. 発表標題 性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発 - 新版K式発達検査2001との関連について -
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideyo Goma, Shun Tanaka, Michio Ushiyama, Rika Ochiai, Kazuhisa Inoue, Toshihiro Kato, Tomomi Ikeda, Satomi Shimizu Yoko Mutou, Natsumi Maruo, Takashi Otani
2. 発表標題 Creation of a scale for the assessment of social and behavioral development in preschool children
3. 学会等名 IASSIDD 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 落合利佳、郷間英世
2. 発表標題 自己評価尺度を用いた、児童の学校生活と社会スキルに関する研究
3. 学会等名 日本学校保健学会第66回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五位塚和也
2. 発表標題 自閉スペクトラム症児の社会的情報処理様式：他者からの好意の明示性および心理社会的適応との関連性
3. 学会等名 LD研究
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	郷間 英世 (GOMA HIDEYO) (40234968)	姫路大学・看護学部・教授 (34534)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	五位塚 和也 (GOITSUKA KAZUYA) (80783109)	大阪大谷大学・教育学部・准教授 (34414)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	家森 百合子 (YAMORI YURIKO)	家森クリニック・理事長	
研究協力者	岩見 美香 (IWAMI MIKA)	家森クリニック・院長	
研究協力者	玉村 総枝 (TAMAMURA FUSAE)	家森クリニック・公認心理師	
研究協力者	中市 悠 (NAKAICHI HARUKA)	家森クリニック・公認心理師・言語聴覚士	
研究協力者	久保見 篤 (KUBOMI ATSUSHI)	家森クリニック・公認心理師	
研究協力者	早川 智子 (HAYAKAWA TOMOKO)	家森クリニック・言語聴覚士	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------